

[課題 1] ビデオによる評価

- 1) 姿勢・運動パターンの評価
- 2) 平衡反応(バランス反応)
- 3) 随意運動を観察するなかでの筋緊張と ROM の評価

[平衡反応の検査]

1, 長座位:姿勢パターンの評価

静的な姿勢保持時に、骨盤は後傾して股関節は内転・屈曲し、膝関節も屈曲している。上肢を屈曲する(バンザイをする)と、骨盤の後傾位、肩関節の内旋、股関節と膝関節の屈筋痙性が強まる(連合反応)。

2, 平衡反応の検査の実施

刺激の方向と強さ	反応
1)後方への平衡反応 a 両下肢を保持して床から挙げる(後方へ重心を移動) b aよりも床から高く下肢を挙げる。	肩関節の内転、屈曲痙性が強まり体幹を屈曲させて、後方へのバランスの崩れを代償する。この時股関節、膝関節の屈曲痙性も強まる 後方へ倒れる。肩、肘関節の屈曲痙性が a よりも強まり後方への保護伸展反応は出現しない(後方へ上肢が伸展せず屈曲する)。
2)側方への平衡反応 a 左下肢を右下肢より高く挙げる(右への平衡反応) b 右下肢を左下肢より高く挙げる(左への平衡反応)	右側方への刺激に対して、(側方への重心の移動を防御して)体幹を屈曲させてしばらくして手で支える(側方への保護伸展反応が出現)この時、肩、肘、股、関節の屈曲痙性がやや強まる(後方への刺激に比べれば弱い)・・・刺激を加える前から手を床についている 体幹の屈曲、肩関節は外転内旋を強めて側方から後方へ倒れる。 *指示がないと、手をついて支えているのでバンザイをしてもらう
3)上肢に直接刺激を加える方法 a 前方へ平衡反応 b 側方への平衡反応	刺激を加える前から両側手で支えている(他の検査に比べて、肩、肘、股、膝関節の屈曲痙性は強まらない) 刺激を加える前から両側手で支えている 両側とも保護伸展反応が出現する(支持側の肩の外転、伸展反応が出現する。*下肢からの刺激に比べて上肢の屈曲痙性は強まらない。
C 後方への平衡反応	後方への重心の移動を防御するために体幹を屈曲させて代償する。特に股関節と肘関節の屈曲痙性が強まる。更に刺激を強めると後方へ倒れる
※自動、他動的 ROM	股関節、膝関節、肩関節、肘関節の伸展制限と股関節と肩関節の外転制限について検査予定